

けがなどの応急処置法と事故発生時の対応

けがなどの応急処置法

1. 切り傷(包丁やガラスなどによる切り傷)

出血を止めることと、細菌の感染を防止することが大切である。

1) 傷口をよく洗い異物の除去

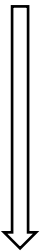


細菌による感染を防ぐために、異物を取り除いてから流水で傷口をよく洗う。

* 消毒液は、かえって傷口の回復を遅らせてしまうため、できるだけ使用しない。

* 持続的に、勢いよく出血しているような場合は、先に止血を行う。

2) 止 血



出血している傷口に清潔なガーゼや布を当てて、手のひらで約 10 分間・圧迫止血を行う。出血した部位を心臓より高い位置にする。そうすることで、血液が患部にいきにくくなり、出血するスピードを遅らせることができる(輪ゴムで指の根元を縛っての止血は行わない)。途中(1～ 2分程度)で圧迫をやめて傷口を確認したりすると、塞がりかけた傷口がまたもとに戻ってしまうことがあるため、持続して圧迫することが重要である。

3) 処 置

止血後、傷口を保護する。

2. やけど(熱傷)

やけどをした直後は、すぐに冷やすことが大切である。冷やすことで、痛みを和らげるだけでなく、やけどの範囲が広がったり、深くなったりすることを抑える。

1) 流水で冷やす

(処置方法のポイント)

- ・できるだけ早く、**水道水などの清潔な流水で十分に冷やす**。
氷や保冷剤を使って長時間冷やすと、冷えすぎるため、かえって悪化することがある。
氷や保冷剤を直接患部にあてないようにする。
- ・靴下などの衣類を着ている場合は、**衣類ごと冷やす**。
- ・広い範囲にやけどをした場合は、体全体が冷えてしまう可能性があるため、冷却は10分以内にとどめる。

(やけど(熱傷)の程度と留意点)

○ 浅いやけど

浅いやけどは、皮膚が赤くなり痛みがあるが、水ぶくれがない状態。
この場合は、**水でよく冷やす**ことが重要である。

◎ 中程度の深さのやけど

中程度の深さのやけどとは、水ぶくれができている状態。
水ぶくれは、やけどの傷口を保護する役割があるので破かない。**すぐに水で冷やした後に、ガーゼやタオルで覆って水ぶくれが破れないように保護**し、できるだけ早く医療機関を受診する。なお、水ぶくれが破けても薬などは塗らない。
ガーゼやタオルで覆いきれないような大きな水ぶくれになった場合もできるだけ早く医療機関を受診する。

● もっとも深いやけど

もっとも深いやけどは、水ぶくれにならずに、皮膚が真っ白になったり、黒く焦げたりした状態。**すぐに医療機関を受診**すること。

事故発生時の対応

1) ガス漏れ

火気は絶対使用しない。ガス漏れ中に換気扇や電灯などの電気のスイッチを押すと、着火源となる小さな火花が発生しガス爆発の原因となるため、**スイッチには絶対手を触れない**。

(対応方法)

1. ガスの使用をやめる
2. 窓を開ける
3. ガス栓・器具栓を閉める
4. メーター栓を閉める
5. ガス臭い場所から離れる
6. 事業者に連絡する

2) 火 災

初期対応の3原則

もし、火災が発生したら、「**通報**」「**初期消火**」「**避難**」の順に行動すること。

ただ状況によって優先順位は異なるため、逃げ遅れないよう冷静な判断をすること。

なお、初期消火は、消火器を使用するとよい。

初 期 消 火

1. 消火器を使用した方法

初期消火は、消火器を使用した消化方法が推奨されている。初期消火に使用する消火器の使用法について下記に示す。

(消火器の使い方)

1. 安全ピンを上強く引き抜く
2. ホースのノズルを持ち、火元に向ける
3. レバーを強く握って噴射する

2. 消火器がない場合の初期消火の方法(初期消火方法:消火器などが近くでない場合)

1. 濡れたタオルなどを水が垂れない程度までよく絞る。
2. 炎に注意しながら鍋を完全に覆う。
3. さらに濡れたタオルなどを数枚重ねて、窒息消火を行う。
4. コンロの火を止める。
5. タオルなどはかけたままにし、119番通報を行う。消えたと思いタオルを取ると、再び燃え始めることがあるためタオルは取らないこと。

***慌てず落ち着いた正しい行動が、自分自身を守り、延焼拡大を防ぐことができる。**